『田舎教師』の「理想」の行方

― 林清三を取り巻く言葉とまなざし ―

出木良輔

はじめに

田山花袋『田舎教師』（左久良書房、明治四二年一〇月）をめぐってこれまでに発表された論考は膨大な数に登る。宇野憲治や[1]安藤恭子は[2]早い時期にこれらを系統づけて整理しているが、そこでも挙げられているように、林清三のモデルとなった実在の小学校教員・小林秀三の「日記」[3]との関連性については特に多くの指摘がある。これらはいわば「田舎教師」論における一つの前提とも言えるものだが、その一方で物語化された「日記」としての側面にのみ収斂しない表現性に着目した研究も数多くなされている。特に近年ではテクスト外の諸言説との関係性にも考察が及び[4]、「田舎教師」は同時代の言説状況を戦略的に取り込みながら構築されたテクストとして捉え直されつつある。

清三が愛読する「武蔵野」などの文学作品や『文芸倶楽部』・『明星』といった文芸誌についていち早く着目・言及したのが藤森清である。[5]藤森はテクストに「引用」されたこれらの文学作品や文芸誌の「固有名」が担う機能を指摘しているが（後述）、一方で「田舎教師」が以下のような雑誌の「固有名」をも記している点は従来着目されてこなかった。引用するのは、着任前に清三が校長宅を訪れ、「校長の室」に目を向ける場面である。[6]

（前略）茅葺屋根の一軒立ではあるが、つくりは総て百姓家の構で、広い入口、六畳と八畳と続いた室の前に小さな庭があるばかりで、細君のだらしのない姿も、子供の泣顔も、茶の間の長火鉢も、畳の汚れて破れたのも、表からくる人の眼に皆映った。校長の室には学校管理法や心理学や教育時論の赤い表紙などが見えた。（三）

開発社より明治一八年四月に創刊された教育雑誌『教育時論』は、明治二〇年代には既に「代表的な教育雑誌として数えられ」、「時

事の代表的と思える教育問題をとりあげ」ることを特長とする「教育時事報道誌」として機能していたという。[7] 当時の同誌には紅色の表紙が用いられており、「赤い表紙」という引用部の記述とも合致する。さらに付け加えておくと、校長宅を訪れた際に『教育時論』を目にするといった内容の記述はモデルの「日記」には存在していないため、[8]「校長の室」や『教育時論』を描く一連の場面は花袋の創作と考えて良いだろう。「田舎教師」には、教育雑誌というメディアを通して教育関係の時事や文化・思想の学習に努める地方在住教員（校長）の姿が描かれていることになるのだ。

もっとも、右の引用部直後の「学校教授法の実験に興味を持つ人間と、詩や歌にあくがれて居る青年とがかうして長く相対して坐つた。」（三）という一節からも垣間見えるように、この場面においては文学青年・清三が校長と対比される人物として描かれる点こそが重要なのかもしれない。しかしそうだとしても、教育雑誌『教育時論』の名がここに記されることの意味はさほど小さくないはずだ。[9]

先に触れた藤森は、実在の文学作品や文芸誌の「固有名」を多数「引用」する「田舎教師」から「明治30年代の時代状況、特にその文学的状況を再現しようという意図」が読み取れると説く。してみれば、このように同じく実在の教育雑誌の名をも映す「田舎教師」は、明治後期の教員たちを取り巻く言説状況とも接続され得るのではないだろうか。[10]

もちろん「田舎教師」の表現性を同時代の文化・社会状況の「再現」性にのみ単純化することは出来ない。考えてみたいのは、「田舎教師」というテクストが、明治後期の教員を取り巻く言説編成を反映し「再現」するだけでなく、それらを相対化するような可能性をも有しているのではないかということだ。

このような観点から林清三という教員を取り巻く人々や言葉のありようについて検討し、「田舎教師」の教員表象について再考することが本稿の主眼である。具体的にはまず、清三に対し「人間としての理想のライフ」（十四）を説く山形古城（成願寺住職）の語りや彼が勧める『武蔵野』が明治後期の教育の言説空間においてどのように位置づけられるものだったのかを確認し、清三という教員にとってそれらの言説がどのような意味を持ち得たのか考察する。加えて、遊郭通いや借金の滞納といった自堕落な生活に向かいながらも「真面目」になってゆく清三の姿についても検討することで、清三の内面変化のプロセスを追う。

また、このような清三の内面はほとんどが独白などの形で語られ、読者にのみ提示されている。清三の死後を描く物語結末部においてこのことがどのような効果を生んでいるのか、彼の教え子であり後に小学校教員になったとされる田原秀子の存在に着目しつつ検討を加えたい。

以上のような考察を通じて、「田舎教師」という、明治後期の学

校教員を描く言説が持ち得た意味や批評性を捉えてゆくことが本稿の狙いである。

一、「武蔵野」という教育装置

「田舎教師」は、「人間としての理想のライフ」や「理想的な生活」（二十六）を模索し、様々な方向に揺れ動く小学校教員・林清三の姿を描き出す。以下ではまず、この「理想」なるものをめぐる語りの様相について、同時代の教育雑誌が教員たちに対し提示していた「理想的な生活」のありようを確認しながら検討してゆく。

明治後期の教育雑誌に掲載された「教育小説」と「田舎教師」の関係性については和田敦彦がすでに指摘している。和田は同時代の「教育小説」群と「田舎教師」の共通性を明らかにしつつも、「理想の小学教員像を描き出そうとする」「教育小説」と違って「具体的な理想像や、具体的に成し遂げた何があるということも特にないにもかかわらず、「名」が残る、石碑が残る」という「田舎教師」の物語の特異性を指摘する。[11]

ここで言う「教育小説」とは教員を読者として想定する教訓小説のようなもので、その多くは功名心を忘れて地方や郊外での教職に一生を捧げるような（特に小学校）教員を神聖なる〈理想の教員像〉として表象する。一方でこうした小説や論説なども含めた同時代の教育言説においては、都市への転勤や実業界・政界への進出、さらには中等・高等学校への転任といった、あらゆる階層上昇が「虚栄」の発露などとして否定的に語られると共に、それを志向する教員に「俗物」などというレッテルが貼られてゆくこととなる。[12]

地方での教職に一生を捧げる教員を「村夫子」などと称しながら神聖化する明治後期の教育言説だが、それらの語りと「田舎教師」の登場人物たちの語り、とりわけ都市と地方をめぐるそれのありようを対比してみると、林清三という地方在住教員を取り巻く言葉が同時代の文脈の中で持ち得た意味も浮上してくる。教員の「都会熱」を諌める言説は明治三〇年代の『教育時論』にも複数見られるが、[13]都市と地方を語る教育雑誌掲載記事の一例として興味深いのが天野雉彦「都会より田舎へ」（『教育学術界』明治四一年一一月）だ。ここには以下のような一節がある。

> 君都会の生活は罪の生活だよ。都会の住人は、旅心で、尻が落ち付（ママ）いて居ない処から、「旅の恥はかき捨て」といふ考が都会に住む凡ての人々の心の底に潜んで居る。都会が罪悪の淵叢となるのはこれから起るのではあるまいか。富者の専横、貴族の跋扈、官吏の収賄、軍人の腐敗、貴婦人の虚栄、男女学生の堕落と、ごつたがへしに、殆んど罪の塵塚の感がある。

「都会」に住む「僕」が「田舎」に住む「君」に語りかける形式のテクストだが、都市への移動を否定的に語る教育言説のパターンがここでも反復されている。同時に、「富者の専横」や「貴族の跋扈」

を「都会の生活」の象徴として語る右の記述が、東京を「人の弱点を利用したり、朋党を作つて人を陥れたり、一歩でも人のさきに出やう出やうと齷齪して居る」人々の「蝸牛角上の争闘」の場として語り（十四）、「人間としての理想のライフ」から程遠い場として位置づけてゆく山形古城の言説と似通ったものでもあることは見逃せない。都市と地方をめぐる古城の語りは、教員を取り巻く同時代言説のありようをなぞるかのような様相を呈しているのだ。

清三に対し古城が国木田独歩の『武蔵野』を読むよう勧めるというエピソードもこのことを裏付ける。「武蔵野」や「忘れ得ぬ人々」は、清三の「自然の見方」に影響を与えたものとしてしばしば注目されてきたが[14]、永井聖剛が指摘するように地方生活を送る清三の（「屈折した」）現状肯定を支えるものとしてこれらが機能している点にも注目すべきだろう[15]。特に「武蔵野」に描かれる牧歌的で平和な郊外生活のイメージは、上京経験者の古城が語る「蝸牛角上の争闘」に満ちた「都会」のイメージと相補関係にあるものとして捉えることが可能だろう。「田舎」―「都会」という二元論的な発想に基づいて前者を聖・善なるもの、後者を俗・悪なるものとして語るこれらの言説を吸収することを通して、清三は自らの地方生活を、そしてそこで「名誉」と縁遠い小学校教員の職に身を置くことを「理想のライフ」として称揚し、自己を慰藉してゆく。

何より重要なのは、先に見たように地方や郊外での生活を賛美する教育言説においてしばしば引き合いに出されるのが、他でもない国木田独歩の「武蔵野」だったということだ。例えば、同文館発行の教育雑誌『教育学術界』に掲載された抱懈生（沼田笠峰）「東京西郊汽車の窓」（『教育学術界』明治四〇年一二月）の語り手は独歩の「武蔵野」と実際の武蔵野の光景を重ねあわせ、以下のように語る。

六年の昔、汽車の窓で『武蔵野』を読んだ、而もそれは、徒らに文字を辿つたのみであつた。爾来六年を経てまた秋を迎へ、身は武蔵野の片ほとりに在つて、同じく汽車の窓で『武蔵野』の一節を心に浮べる。あら、武蔵野！　いまさらに昔なつかしい矣。（中略）

見よ、野末にさびしい一軒家からも、夕の燈火が漏れて、楽しさうな団欒（まとゐ）の聞（こえ）が聞（ママ）こえるではないか。（中略）けれども、憐れむべし！　遊子の懐には、うす寒い秋風が吹き入る外、何物をも取り入ることは出来ない。

郊外の「一軒家」に見える「団欒（まとゐ）」を美しく理想的なものとして提示し、一方でそれを享受し得ない「遊子」、いわば社会的成功を求めて移動を繰り返す人々を「憐れむ」べきものとして語る記述だ。「武蔵野」に描かれるような牧歌的な郊外の美がこうした論理を支えるものとして用いられていることは言うまでもないが、時に「何でも好いから」「社会を風靡するやうなこと」（二十六）や「何か一つ大きなことでも為たい」（三十六）などと語り、様々な手段で階

層上昇を試みる清三のような教員に対し、右のような言説は批評性を有していることになろう。このテクストにおいて「武蔵野」は郊外生活を称揚する教育言説のイデオロギーと結び付けられ、いわば一種の教育装置として機能しているのだ。

このように独歩の「武蔵野」の名を直接は挙げずとも、武蔵野という土地と「自然」への憧憬を打ち出すもの、いわば「武蔵野」を反復するかの如く美化された郊外イメージを読者に押し付けるようなものも教育雑誌掲載記事の中に見出すことが出来る。「宛然一幅の画の中に立つてる様な心地」をもたらす武蔵野の自然の中で「僕は、此の景色に一年中酔つて見たい」と語る人物像を描き出す石野石碌「小説洪水」（『小学校』明治四一年七月五日）がその一例だ。先の「東京西郊汽車の窓」の書き手である沼田笠峰は、「八王子の一日」（『教育学術界』明治四三年一月）でも「落葉地に敷く冬の郊外のさまは、いかに詩趣ゆたかな眺めであらう」「武蔵野の初冬は、いかに自然の児の胸を躍らせるであらうぞ」などと、武蔵野での郊外生活を理想化する。

もっとも、永井聖剛は『文章世界』においても「功名心に囚われない地方生活にこそ「理想のライフ」が存することが了解され、さらにその道徳＝価値観を共有できる者たちの共同体が排他的な力を行使しさえしてい」た可能性を指摘し[16]、山本歩も「「文章世界」の誌上には既に、「田舎」、無名、教師、夭折などの『田舎教師』の要素が出そろっていた」ことを明らかにしている[17]。また、柳田國男も武蔵野に代表される郊外や地方での生活を理想化する当時の言説状況を「武蔵野趣味」という言葉で捕捉しているように[18]、このように郊外や地方での生活を過剰なまでに美化する記述は教育雑誌においてのみ展開されるものではない。

とはいえ、先述の通り教員の階層上昇や都市への移動に対する否定的な表現を反復してきた教育雑誌において、「武蔵野」の固有名が用いられながら郊外や農村での生活が美化されていた事実は看過出来ない。以上見てきた教育雑誌掲載記事からは、地方在住教員の上昇願望を抑制し、いわば「クール・アウト」[19]を促す教育装置として「武蔵野」というテクストが機能していた可能性を見出すことも可能だろう。つまり「武蔵野」などを読むことで地方生活を「理想のライフ」として見出し、都市への憧れや〈立身出世〉願望を鎮めてゆくといった清三の態度は、明治後期の文学やメディア、教育言説によって促されるものでもあったのだ[20]。こうした意味で、「武蔵野」受容を通して「田舎」での教員生活に充足感を見出してゆく清三は、明治後期の教育言説を従順に内面化した教員読者としての側面を無自覚ながらも抱え込んでしまっていることにもなるだろう。

二、「辛い悲しいライフ」

以上のような諸言説を取り込みながら、清三は「田舎」という場

や、そこで小学校教員として生きることを都市生活よりも価値ある「理想のライフ」として見出してゆく。そしてそれと並行するように、小学校教員の職をめぐる清三の語りにも変化が生じ始める。

（前略）「自分はどんな事業をするにしても、社会の改良でも思想界の救済でも、それは何をするにしても、人間として生きて居る上は生られるだけの物質は得なければならない。そしてそれは成るべく自分が社会に尽した仕事の報酬として受け度いと自分は思ふ。それには自分は小学校の教員から段々進んで中学程度の教員にならうか。それとも自分はこの高き美しき小学教員の生涯を以て満足しやうか」などと考へることもある。一方には多くの友達のやうに花々しく世の中に出て行き度いとは思ふが、又一方では小学教員を尊い神聖なものにして、少年少女の無邪気な伴侶として一生を送る方が理想的な生活だとも思つた。友に離れ、恋に離れ、社会に離れて、わざとこの孤独な生活に生きやうといふやうな反抗的な考も起つた。（二十六）

「一方には多くの友達のやうに花々しく世の中に出て行き度いとは思」いながらも「高き美しき小学教員の生涯」を全うすることを「理想的な生活だとも思」うなど、清三の「理想」は揺らぎ始める。そしてそれ以上に重要なのは、着任直後から「一生小学校の教員をする気はない」（三）ことを校長に仄めかし、「一生小学校に勤めてゐる人間」（十五）を蔑視するような独白を述べてきた清三が、ここで「高き美しき小学教員の生涯」すなわち「少年少女の無邪気な伴侶として一生を送る」ことを「孤独な」しかし「理想的な生活」として意識し始める点だろう。「人間としての理想のライフ」を説き、地方生活を賞賛する山形古城の言葉や彼が勧める『武蔵野』がこうした清三の内面形成に影響していることは明らかだ。

要するにこれらは「田舎」で「高き美しき小学教員」として生きることこそが「尊い神聖な」ものであり「理想的な生活だ」とする〈教育〉を清三に施す言説だったのだと言っても良い。小林秀三も『武蔵野』の感想を「日記」に綴っているが、清三が愛読する書物として「田舎教師」に「引用」される『武蔵野』は先に述べた通り時代状況の「再現」にのみ終始するような単純なものではなく、清三という教員を〈教育〉する言説装置として再配置されているのだ。

もっとも、『武蔵野』を称揚する古城の言説と同時代の教育言説の相同性についてここで改めて言及しようというわけではない。確認しておきたいのは、「田舎」の「辛い悲しいライフ」を「発見」（二十九）することで、清三の中で神聖化されつつあった「田舎」イメージが結局は解体されてゆくことだ。「田舎も矢張り争闘の巷利欲の世であ」りさらには「存外猥褻で淫靡で不潔である」など、「武蔵野」において語られることのなかった「田舎」のありようを目の当たりにする清三の姿は、先に見たように地方生活を美化して描く教育言説と「武蔵野」の双方を相対化しているとも言える。

この「発見」を描く一節以降、清三が「機織女」たちに「学校の先生さん！」「い、男の林さん！」（二十九）と挑発されたり、盆踊りの際「女づれ」に同じように絡まれた挙句「学校の先生があまつちよに酷められて居る！」（三十）と嘲笑されるなど、「田舎」の「猥褻で淫靡」な側面が強調されるとともに、「学校の先生」の価値までもが貶められるようなエピソードが集中的に語られてゆくことも重要だろう。古城の発言や「武蔵野」によって美化された「田舎」のイメージに入った亀裂はほぼ同時に、「田舎」で教職に身を捧げる「高き美しき小学教員」としての自意識にまで及んでゆくのだ。

「田舎」への失望感は、清三が遊郭に「新しい希望」（三十一）を求めてゆくことの遠因となってゆくのだが、遊郭通いや借金の滞納（三十一～三十六）といった「不真面目な生活」（四十）を描く一連のエピソードは、「高き美しき小学教員」「少年少女の無邪気な伴侶」などという理想化された教員イメージとは重ね難い清三の姿を映し出す。特に中田遊郭通いのエピソードは、モデルの「日記」に該当する記述が存在しない箇所として多くの注目を集めてきたが、この行為が清三の「不真面目な生活」を象徴するものであることは確かだろう。

また、この遊郭通いに際して繰り返される清三の内的独白は、小堀洋平が言うように「自己の社会的位置に対する清三の自覚」[21]を、あるいは彼の職業意識を示している点でも注目される。例えば遊郭で一夜を過ごしたことを「堕落」（三十二）と捉えたり、「自己の境遇と女に対する自己の関係とを真面目に考へ」た時に「自分は小学校教員である。さういふことが鳥渡でも知れゝば勤めて居ることの出来ぬ身の上である」（三十四）という葛藤が語られるのも、清三が「小学校教員」に対する社会のまなざしを規律として内面化しているが故のことだ。

教員に対する社会のまなざし、換言すれば当時の教員を取り巻く言説のありようを清三は確かに理解し内面化していたのだ。しかし彼が「不真面目な生活」に陥ってゆく様を描く一連のエピソードには、明治期の社会において「理想」とされる教員像と重なり合うことの出来ない清三と、彼の葛藤が描かれている。

三、「検定試験を受んとす、科目は植物に志す」

以上のことを踏まえた上で、その後「急に真面目になつた」（四十）清三の姿についても見ておきたい。清三の「真面目」さは、日記を書くという行為とも対応している[22]。明治三五年の秋、遊郭通いを始め「不真面目な生活」に陥った頃から中断していた日記は、彼が「真面目になつた」とされる翌年一一月一五日に再開されるのだ。この日記の記述の中でも注目すべきは、「真面目になつた」清三の変化と彼の「向上」心を示す形で、「検定試験」受験の意向が以下のように記される点だ。

明治三十七年、

一月一日――新しき生命と革新とを与ふべく、新しく苦心と成功と喜びと悲しみとを下すべく新年は来れり。若き信念は向上の好機なり。願はくば清く楽しき生活を営ましめよ。△「新年を床の青磁の花瓶に母が好みの蔓梅もどき」△小畑に手紙出す、これより勉強して二年三年の後、検定試験を受んとす、科目は植物に志す由言ひやる。（四十一）

清三が受験を志す「検定試験」は、明治一七年に制度化された文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験（「文検」）を指すと考えて良い。この資格試験は、高等師範学校や文理科大学といった高等教育機関を経ていない人々が中等教員免許を得るための機会であり、「初等教員にとって中等教員への上昇移動の重要な手段」であったという[23]。

なお、清三のような無資格の教員に小学校正教員資格を与える試験は「文検」とは別に存在していた（小学校教員検定試験）。小学校教員検定試験は倫理や国語、算術、図画といった複数の科目が課される試験であり、「文検」のように植物科単体での受験は出来ない。清三が明治三七年頃に「文検」受験を志していたことはこの点からも明らかだろう。「田舎教師」においてはしばしば小学校教員検定試験と「文検」が共に「検定試験」という言葉で語られるため分かりづらくなっているが、校長が「資格さへあれば、月給もまだ上げてあげることが出来る」からと清三に受験を「常に勧めた」という「検定試験」（十五）は、小学校教員検定試験を指すと捉えるのが妥当だ[24]。

先に見たように、このテクストは「小学校の教員から段々進んで中学程度の教員にならうか」「それとも自分はこの高き美しき小学教員の生涯を以て満足しやうか」と、二つの生き方の間で揺れる清三の内面を描いてもいた。しかし「文検」受験の意向を示す右の記述からは、最終的に「中学程度の教員」を志向してゆく清三の姿を読み取ることが可能だろう。

もちろん、「文検」受験の企図が中等教員への転身の意志を直ちに意味するわけではない。例えば寺崎昌男は、高難易度だった「文検」には教員志望以外の受験者が多数存在し、彼らが自らの学力を証明する手段として「文検」を利用していたことを明らかにしている[25]。そのように清三が自己肯定の手段として「文検」に臨もうとしていたと考えることも不可能ではないだろう。

だとしても、「急に真面目にな」り、なおかつ「日記に書けぬやうなことはせぬ」（四十）ことに価値を見出した清三が、中等教員の資格取得の機会である「文検」受験の意向を小畑に伝え、それを日記にも記していることの意味は小さくない。この時期の教育言説が教員の階層上昇を否定的に語っていた事実を再度引き合いに出すまでもなく、「文検」受験の意向は同時に「高き美しき小学教員の生涯を以て満足」することへの拒否を示唆するものでもあるはずだ

からだ。この何気ない日記の記述からも、やはり「高き美しき小学教員の生涯」とは違う生き方を選び取りつつある清三の姿が露呈していると言えよう。

しかし言うまでもないが、「田舎教師」の物語は最終的に都市への進出も「文検」受験も遂げることなく死んでゆく清三の姿を描き出す。林清三という一人の小学校教員は、いかなる階層上昇をも果たさない・果たせないままこの世を去ってゆくのだ。言い換えれば、地方の小学校教員として一生を終えた清三は、同時代の教育言説において「理想」とされる教員の生き方を実質的に反復してしまっていることとなる。そう考えると、清三の死後に建立される「自然石の石碑」とそこを訪れる「女学生風の娘」（六十四）の存在が担う意味についても再考の余地が生じる。

和田敦彦は、これらを描き出す結末部から「無名なのに名が残る、何にもなっていないのに名が残る、というこのテクストの奇妙さ」を見出している[26]。しかし「何にもなっていない」ばかりか、先に見た通り「高き美しき小学教員の生涯を以て満足」することを拒否した清三は、同時代の教育言説が批判を差し向けるような教員としての側面を有してもいた。にもかかわらず彼を頌徳するかの如く「石碑」が建立され、そこにかつての教え子が訪れるという物語の結末を以下で改めて問題としてみたい。

四、「教へ子」のまなざし

ある秋の日、和尚さんは、庇髪に結つて、矢絣の紬に海老茶の袴を穿いた女学生風の娘が、野菊や山菊など一束にしたのを持つて、（中略）林さんの墓の所在を聞いて、其前で人目も忘れて久しく泣いて居たといふことを上さんから聞いた。（中略）

処がそれから二年ほどして、其墓参をした娘が羽生の小学校の女教員をして居るといふ話を聞いた。「あの娘は林さんが弥勒で教へた生徒だとサ」と上さんは何処かで聞いて来て和尚さんに話した。（六十四）

後に「羽生の小学校の女教員」となったと語られる「女学生風の娘」は、「浦和の師範学校」（四十三）に通っていた田原秀子と考えて差し支えないだろう。清三の教え子であり、さらには彼と同じ小学校教員の職に就く存在として設定された秀子だが、彼女を含め「田舎教師」に登場する女性たちと清三との関係性については既にいくつかの考察がある。例えば神田知怜は、彼女たちがいずれも「「都会的な要素を持つ」という点で共通した特徴を持」つと指摘し、清三は彼女たちを羽生や浦和といった土地と「紐づけ」ることで「田舎に都会的な要素をちりばめ」、「都会へのあこがれ」を満たそうとしていたのだと説く[27]。浦和や弥勒、後に羽生と「紐づけ」られた秀子もそうした女性の一人というわけだ。

しかし、清三と秀子の交友のユニークなありようや、教員と教え子という彼らの関係性にも注意を払う必要があろう。歌・新体詩といった文学的な言葉を媒介とした彼らの交友は、文学に没頭していたかつての清三の姿を呼び戻すものでもある。病に蝕まれつつある清三に光明をもたらすかの如く現れた「愛するなつかしの教へ子」秀子と「恋しきなつかしき先生」清三（四十七）の親密な関係性は、一見すると教え子の卒業後も彼らの「無邪気な伴侶」であろうとする「高き美しき小学教員」として清三を再生させる装置のようにも映るだろう。

一方、「鳥渡見ぬ間に非常に大人びた」秀子の姿や「女には娘になつた隔てが何処となく出て居るし、男には生徒としてよりも娘といふ感じがいつもの隔てのない会話をさまたげた」（四十三）という一節によって、教員と教え子というかつての関係が「男」と「女」のそれに変容し得るものであることも示唆される。このきわどさは二人の間に「隔て」を生じさせているが、清三は羽生への転居に際して「ひで子を自分の家庭にひきつけて考へ」始め、彼女の「明かな笑顔を得た」「新家庭」の「幸福」なありようを夢想してゆく（四十九）。清三を「少年少女の無邪気な伴侶」へと揺り戻すかのように描かれた清三と秀子の関係だが、言うなれば清三は自らの「幸福」を満たす「伴侶」としての役割を秀子に期待し始めるのだ。

ただしそれ以上に重要なのは、こうした清三の内面やそれ以前の「不真面目な生活」などといった諸々の事実が常に秀子のあずかり知らないところで語られていることだ。冒頭で述べたように清三の内面は独白や日記の記述といった形で語られ、読者にのみ提示されている。言うなれば、テクスト総体が描き出す林清三と、秀子が思い描く「恋しきなつかしき先生」林清三との間には些かのズレがあるのだ。

清三と同じく小学校教員となった秀子にとって、「恋しきなつかしき先生」林清三との交流はどのような意味を持っているのだろうか。彼女の教員生活はこのテクストにおいて語られておらず、それゆえどのように想像することも可能かもしれない。しかし、卒業後も続く彼らの親密な交流のありようや「石碑」に訪れる秀子の描写を踏まえるなら、「恋しきなつかしき先生」あるいは「高き美しき小学教員」としての林清三を心にとどめ続ける一人の教員として田原秀子を捉えることも出来るはずだ。時に教職を蔑視するような清三の内面独白や「不真面目な生活」をあずかり知らない秀子にとって、清三はあくまで「高き美しき小学教員の生涯を以て満足し」、地方の小学校教員の職に一生を捧げた畏敬すべき存在に他ならないのだ。

『『田舎教師』の展開は、主人公が運命に抗い、境遇からの脱却を図りながらも、挫折していく過程とともにある」と述べる岸規子は、「田舎教師」の物語の結末について「清三に注がれるひで子の眼差

しは、彼の生が今なお人々の心に生き続けていることを示している」とし、「まさに清三は、彼を知る人々の暖かい眼差しに包まれて、その一生を記憶されることになった」のだと結論付ける[28]。岸が指摘するように、清三が「境遇からの脱却を図りながらも、挫折していく過程」を「田舎教師」の物語が描き出していることは確かだ。ここまでに確認してきた通り、清三の生前最後になされようとしていた「境遇からの脱却」の試みこそが「文検」受験であり、それもまた病により「挫折」していったのだ。

一方で、こうした清三の内面の実態をあずかり知らない他者の「心に生き続けている」清三とは、あくまで他者の眼に映る像（イメージ）としての清三に過ぎないはずだ。むしろ清三は、彼の内面をあずかり知らない他者に囲繞された存在だった。事実このテクストは、自身の「心の底」を「誰も知つて呉れるもの丶ない心の寂しさ」（二十二）に嘆息する清三の姿を描いてもいる。

繰り返しになるが、「不真面目な生活」を経て最終的に「文検」受験を志向した清三がその欲望を果たせないまま死んでゆく様を「田舎教師」は描いている。このような清三の欲望あるいは「心の底」は彼の死によって覆い隠されるわけだが、死後清三は「石碑」によって頌徳され、〈理想の教員像〉の如く表象される。清三の教え子であり教員となった田原秀子がこの「石碑」に訪れる様を描く結末部は、秀子という他者の目に映る清三とテクスト総体が語る清三との間のギャップをアイロニカルに浮上させるものとしても捉えられるだろう。

おわりに

戦争報道に一喜一憂する病床の清三の姿、あるいは「遼陽の攻略の結果を、死の床に横つて考へてゐる小さなあはれな日本国民の心は、やがてこの世界的光栄を齎し得た日本国民すべての心ではないか」といった花袋の言は[29]、日露戦争期の青年像とその「哀愁」を描く物語としての色合いを「田舎教師」に強固に付与し続けてきたと言える。それにより見えにくくなっているものの、小学校教員の職と階層上昇や自己実現との間で揺らぎ、最終的には後者を志向したはずの清三が志半ばで病没することで「高き美しき小学教員の生涯」を遂げた人物の如く頌徳されてしまうという歪な結末をこのテクストは描いている。「田舎教師」が描き出す「哀愁」とは、自身の「心の底」を「誰も知つて呉れるもの丶ない」ままこの世を去っていった清三の「心の寂しさ」でもあろう。

教職を蔑視しつつもそこに身を寄せていた清三だが、山形古城の発言や「武蔵野」などの言説を取り込みながら「高き美しき小学教員」「少年少女の無邪気な伴侶」などといったいかにも理想的な教員イメージを徐々に意識し内面化してゆく。しかしながら最終的にそうしたイメージと同一化することも出来ない自己を生きてゆく清三を

映す「田舎教師」は、同時代言説が描く〈理想の教員像〉への接近／離反という構造において清三の内面とその変化を表象しているとも言える。

もちろんこのように図式的な把握にのみ収まらない表現性をこのテクストが有していることも確かであり、そうした側面を捉えてゆく上でも重要なのが清三の死後を描く結末部だろう。清三の「不真面目な生活」も「心の底」も知らぬまま「石碑」の前で落涙する教え子・田原秀子を結末部に描くこの物語は、後に小学校教員となる秀子が清三を〈理想の教員像〉として崇敬し続けてゆく可能性をも抱え込んでいるとは言えまいか。彼の「心の底」をあずかり知らない他者のまなざしによって清三の生のありようは半ば一方的に規定され、時に美化されてゆくのだ。

「田舎教師」はこのように、他者の言葉やまなざしに取り巻かれた学校教員・林清三の姿を描き出す。死後建立された「石碑」は清三を人々の記憶に残し続けるかもしれないが、それはあくまで他者が思い描く林清三という虚構でしかない。明治後期の教育言説において「理想」とされる教員の生き方をはからずも全うしてゆく清三と、その「心の底」を知らぬまま彼の死を悼む秀子の姿を描く「田舎教師」の物語は、林清三という教員像が美化・理想化された虚構として生き続ける可能性をも内包している。他者の言葉やまなざしに取り巻かれ、時に一方的に規定される存在としての学校教員を「田舎教師」は描き出しているのである。

＊引用は全て初出に依る。引用に際して旧漢字は現行のものに改め、ルビは適宜省略した。また傍点は全て私に付した。本稿は、第56回花袋研究学会定期大会（平成二八年六月一八日、於・東洋大学）での口頭発表に基づくものである。発表に際して多くのご教示を賜った方々に記して御礼申し上げる。なお本稿はＪＳＰＳ科研費（特別研究員奨励費・課題番号１８Ｊ０００２１）による成果の一部である。

【注】

（1）宇野憲治「田舎教師―問題点の整理とひとつの感想」（『国文学解釈と鑑賞』昭和五七年七月）

（2）安藤恭子「田山花袋『田舎教師』」（『国文学解釈と鑑賞』平成四年四月）

（3）「日記」本文は小林一郎『田山花袋「田舎教師」モデルの日記所収』（アサヒ社、昭和三八年一二月）および『増補　田山花袋『田舎教師』のモデル日記原文と解読所収』（創研社、昭和四四年一月）により公にされている。

（4）例えば山本歩「「待ちかね」られた物語―『田舎教師』予告記事の考察」（『人文論究』平成二六年一二月）は、『文章世界』などに掲載された「田舎教師」の「予告記事」を考察の対象とする。

（5）藤森清「『田舎教師』の自然描写　影響について自己言及的に語るテクスト」（『語りの近代』有精堂、平成八年四月）

(6) 引用部に付した漢数字は「田舎教師」の章番号を表す。以下同様。

(7) 『教育時論』の書誌情報については「各誌解題」（教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』第Ⅰ期・教育一般編　第二〇巻（日本図書センター、昭和六二年八月）を参照した。

(8) ただし「日記」には「夜学校（ママ）に中井氏荒川氏を訪ひ、「時論」をかりて見る」（明治三三年一一月二日）という記述も存在する。これが『教育時論』を指す可能性は高いが、明治三〇年代には『時論』（時論社）を含め『〇〇時論』というタイトルの雑誌が複数存在するため断定は避けたい。

(9) 明治三〇年代には既に多数存在した教育雑誌の中でも『教育時論』が選ばれたことは偶然ではないだろう。『教育時論』は第六六号（明治二〇年二月）以降「文芸」欄を設置して小説や和歌などをほぼ毎号掲載しており（これ以前にも「雑記」欄に和歌の類が少数ながら掲載されることはあった。明治二三年一一月五日発行の第二〇〇号以降は「文芸史伝」欄に改称）、花袋もここに小品「ひと時雨」（第五六〇号、明治三三年一一月五日）を寄せている。これについては拙稿「田山花袋「ひと時雨」」（『花袋研究学会々誌』平成二八年六月）を参照されたい。

(10) 後年、花袋は「教育圏外から観た現時の小学校」（『小学校』大正五年六月一日）において「小学校教師をした経験」が自分にあれば「『田舎教師』なども、もつと巧く書けたであらう」と述べている。この記事からは、明治後期の小学校教員の生活実態や教員社会のありように花袋が関心を持っていたことや、それを写実的に描出することを「田舎教師」の「巧」さの要件として重く見ていたことが読み取れる。拙稿「田山花袋「教育圏外から観た現時の小学校」」（『花袋研究学会々誌』平成二八年六月）参照。

(11) 和田敦彦「〈田舎教師〉テクスト群と読者―〈記号〉への奉仕―」（『日本文学』平成九年年六月）

(12) 明治期の教育言説や「教育小説」の表現が内包する力学のありようについては、注11和田論に加え、拙稿「教育雑誌『教育学術界』の〈文学〉と青年教員―中内蝶二「寒梅」をめぐって―」（『国語教育論叢』平成二七年二月）あるいは「〈田舎教師〉の欲望をさえぎる―明治四〇年代、教育界のなかの文学―」（『日本文学』平成二八年九月）などでも既に論じているので参照されたい。

(13) 例えば香月喜六「都会熱と農業教育」（明治三四年一二月五日）、小笠原菊根「都会の教員と田舎の教員」（明治三五年一二月一五日）など。香月によれば「都会熱」は横井時敬の造語である。農学博士の横井は「田舎に於ける都会熱並に之が対策」（『大日本農会報』明治三四年一月）において、地方農村から都市への人口流出を「都会熱」と称し問題視した。小笠原も地方在住教員の「都会熱」を戒め、彼らに「良書の精読」を勧める。このような意見は明治三〇～四〇年代の教育言説に通底して見られる。

(14) 亀井秀雄「物語のなかの文学史」（『明治文学史』岩波書店、平成一二年三月）および注5藤森論。

(15) 永井聖剛「田舎教師の復讐―田山花袋『田舎教師』における自己肯定の方法―」（『日本近代文学』平成一八年五月）

(16) 注15に同じ。

(17) 注4山本論。

(18) 柳田國男「武蔵野の昔」（『登高行』大正八年七月・大正九年六月）

(19) 竹内洋『立身出世主義［増補版］―近代日本のロマンと欲望』（世界思想社、平成一七年三月）より借用した用語である。竹内は、地方在住の青年たちが独学の手段として利用していた中学講義録が「実は体よく野心をあきらめ（クール・アウト）させるものだった」可能性を指摘している。

(20) 注14亀井論は清三が「新聞を読む青年として設定」されている点に着目し、新聞という「メディアが田舎にまで浸透して」清三の「自足した生活意識をゆるが」し「感情を方向づけてしまう」様を読み取る。もっとも、小林秀三の「日記」にも彼が新聞を読んでいたことを示す記述が多々あることを踏まえれば、亀井論は右の「設定」に花袋の創作性を認め過ぎているようにも映る。しかしながら、こうした様々な言説やメディアが清三の自己形成に関与しているという観点を亀井論と本稿は共有していると言える。

(21) 小堀洋平「『田舎教師』における花柳界―その虚構の意義について―」(『花袋研究学会々誌』平成二八年六月)

(22) このことについて考える上では、田中祐介編『日記文化から近代日本を問う　人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか』(笠間書院、平成二九年一二月)も手がかりになるだろう。同書所収の複数の論考が指摘するように近代日本において日記を書くことは学校教育の中で用いられてきた行為であり、教育制度の中で推奨され価値付けられてきた行為に他ならない。こうした意味でも、日記の再開が清三という教育者の「真面目」さ、勤勉さを象徴する行為として表象されていることは興味深い。

(23) 山田浩之『教師の歴史社会学―戦前における中等教員の階層構造―』(晃洋書房、平成一四年三月)

(24) 小学校教員検定試験については、中島太郎編『教員養成の研究』(第一法規出版株式会社、昭和三六年二月)ならびに水原克敏『近代日本教員養成史研究―教育者精神主義の確立過程―』(風間書房、平成二年一月)を参照した。

(25) 寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」の研究―文部省教員検定試験と戦前教育学』(学文社、平成九年二月)

(26) 注11に同じ。

(27) 神田知怜「配置された女性たち―『田舎教師』論―」(『近代文学研究と資料　第二次』平成二八年三月)

(28) 岸規子「『田舎教師』を巡る一考察」(『花袋研究学会々誌』平成一五年三月)

(29) 田山花袋『東京の三十年』(博文館、大正六年六月)

―でき・りょうすけ、日本学術振興会特別研究員―